

# バウムテストの幹先端処理について I

—原則と諸問題—

佐渡忠洋<sup>1, 2)</sup>・鈴木 壯<sup>3)</sup>

On Apical Termination in the Baum Test: Part I  
-Principle and Problems-

SADO Tadahiro and SUZUKI Masashi

## Abstract

The objective of Part One of this two-part study was to clarify the principle and problems of apical termination in the Baum test. Apical termination was a viewpoint proposed by Fuzioka and Yoshikawa in 1971 for use in anthropological study, developmental research, and clinical practice. Through a review of their original paper and by considering other literatures, we suggested a principle consisting of three elements of apical termination: (1) to help recognize the whole Baum; (2) to examine a detail of the Baum (top-area of the trunk), which is important in the Baum drawing; and (3) to analyze the Baum representation according to the Whole/Detail “pattern” as emphasized by Wauchpe and Yasunaga. We used the symbol,  $W \rightleftharpoons D$ , for this principle, which summarizes the features of above three elements. Moreover, through a review of the “open trunk form” (*Offene Stammform*) as a concept of the  $W \rightleftharpoons D$ , we described some of the problems encountered in previous research.

キーワード：文献研究・パターン・先行研究

Key Words: literature review, Wauchpe-Yasunaga's pattern, previous researches

## I はじめに

幹先端処理 (apical termination) とは、藤岡喜愛 (1924-1991) と吉川公雄 (1925-没年不明) によって提唱されたバウム理解の着眼点である (藤岡ら, 1971)。半世紀を超える日本でのバウムテスト研究史の中で、この業績は一際輝く奇抜かつ秀逸、世界に誇るものといっても過言ではないだろう。提唱後40年以上を経た今日でも、本着眼点の重要性を説く臨床家・研究者は多い。しかし筆者らは、先行研究を概観する作業の中で、幹先端処理の研究にいくつかの混乱を認めた。この着眼点の意義を実感すればするほど、その現状は残念に思えた。それが本稿に取り組む動機となっている。

本研究は、これまでの幹先端処理研究に対して、一つの筋道を作ることを目的とする。2編

に分けて報告するが、この第1報では、幹先端処理という着眼点の整理を試みる。構成としては、最初に藤岡らの元々の考えをまとめてから、幹先端処理の原則を提案する。そして、提唱以前の諸研究も概観しつつ、幹先端処理とそうではないものとの区別を行い、種々の問題を明確化したい。提唱以後の諸研究については続く第2報で取り上げることにする。なお筆者らは、現在の混乱の原因には先行研究の軽視が大きく絡んでいると考えているので、必要な文献は紙面を惜しむことなく引用し、今後の研究に資したい。

## II 幹先端処理とは何か

### 1 原点・原典の整理

幹先端処理を考えていく上で、まずは原点で

1) 岐阜大学保健管理センター/Health Administration Center, Gifu University

2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科/Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

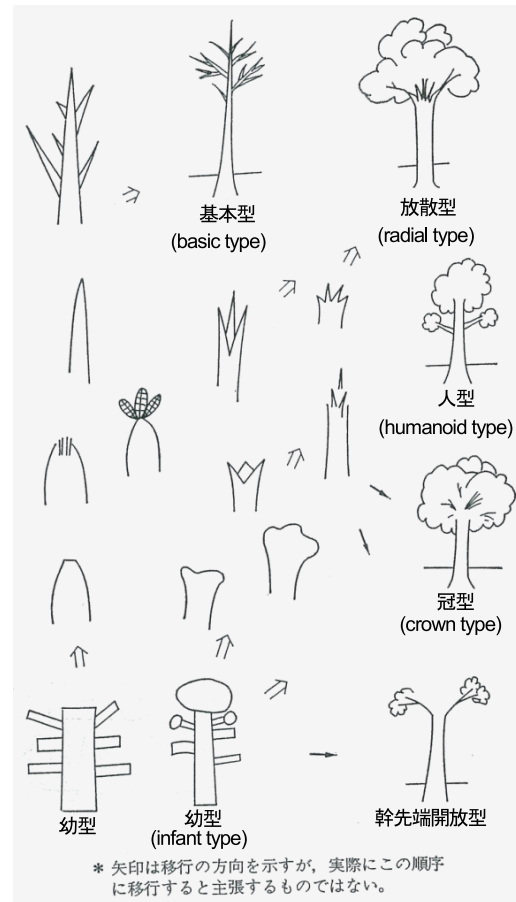
3) 岐阜大学教育学部/Factory of Education, Gifu University

ある藤岡ら (1971) の論文を咀嚼する必要がある。以下、当論文を引用しながら、彼らの考えを整理する。

この原典を読む上で、次のことは押さえておくべきである。それは、彼らがイメージと発達を重視していたことである。前者について、彼らはその重要性と特徴 (直接性や非言語性) に言及してから、バウム描画は「イメージの表現の一種で」、描かれたバウムは「イメージの統合体としてのパーソナリティーの、その統合性をも反映して」と述べる。後者については、「パーソナリティーの成長につれて、木のイメージの表現も当然変化しなければならない」と強調し、発達とバウム特徴との関連を理解しておくことが重要だと説く。これらのことを確認してから (実際には彼らの論文の全体で記されていることであるが)、「バウムに関する人類学的な第一の関心は、バウムがどのように発達するかを通して、パーソナリティーの統合性の発達を知ること」、「第二に、〔その〕統合性の発達は、世界のカルチュア・グループについて一様なものかどうかを問うこと」として、本旨へと歩を進める。

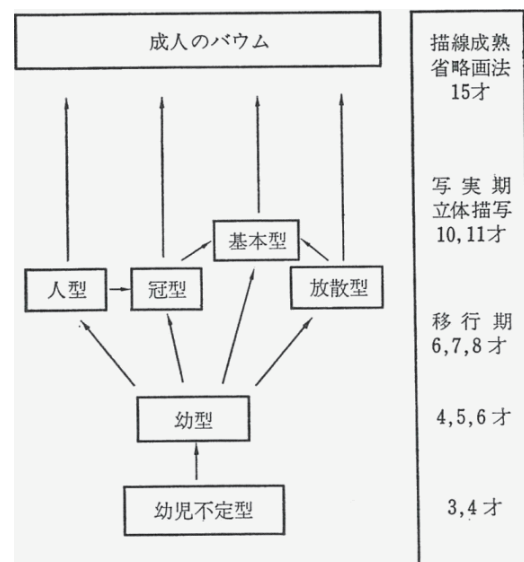
藤岡らは、人類学的な研究を通して得られたバウムを読み込む中で、「すべてのバウムを一貫した態度で眺められるような、大ざっぱな視点が、解析的な項目とは別に、要求されている」と考えた。それは、「イメージ表現としてのバウムは、全体としての一連のパターン認識を、われわれに強制する」ためだという。そして、「この要求には、バウム全姿の類型化を図ることによって、こたえることができ」、その類型化の基点こそ幹先端処理であるとした。というのも、幼稚園児で30%程度認められる「幼型」の幹上部は、「おそかれはやかれ、その不自然さを解消しなければならず」、「その処理上の工夫が、成長後のバウム全姿へと、あきらかに糸をひいている」からである。要するに、彼らは部分的な形態を捉える細かな指標とは別に、バウムを全体的に把握でき、かつ発達の理解にも有用な着目点を幹先端処理に求めたのである。

その取り組みの中で、藤岡らはいくつかの類型を見出した (図1)<sup>註1</sup>。これらは、幹先端処



幹先端処理による類型

※ 英訳は本文から抽出して、今回加えた



バウム成長の概念図

図1 藤岡ら (1971) の類型と移行図

理の研究のみならず、後の類型化の研究にも大きな影響を与えている。しかし、各類型の基準(定義)がしっかりと明文化されていないため、彼らの説明に従って実際にバウムを分類する時、困難を感じてしまう。基準の問題は彼らも意識していたようで、「幹先端処理は事実上かなり困難な、表現上の問題であって、そこにさまざまな移行型を生み出すことになる」とも述べている。ここで基準をあれこれ議論しても実り少ないので、彼らの指摘を、原典の類型には修正の必要性と発展可能性が含まれている、という意味で理解しておくことにしたい。ただし、後に所謂「開放型」とされる「先端開放型」については、「頻度はきわめて低いにもかかわらず、まぎれもなく目立つ類型」で、描き手は「幹先端処理による輪郭閉鎖を完全に放棄したか、あるいはまったく無関心」と述べるにとどまっていたことは言及しておかねばならない。

藤岡らの卓見は、幹先端処理に基づく類型を見出し、「イメージの統合性の要点を、バウムならば必ずなければならない幹先端部の処理法」に認めたことだけではない。マレーシアでの調査結果も踏まえ、例えば日本ではあまり見られないヤシなどのバウムでも「幼型」を通り、「普通樹と同様の幹先端処理の問題が」発達にともなって存在し、「バウム生長の過程そのものは、カルチュアや環境の相違を超えて、同じである」こと、すなわち「幹先端処理は、カルチュアやバウムの樹種のちがいを超えて成り立つ「エソロジカルな現象」であるという卓見に至ったことも、同様に重要な業績である<sup>註2</sup>。

以上が藤岡らの考えの骨子といえよう。しかし、幹先端処理とは何か、という部分が未だ明確でないように思われる。これに答える原則を筆者らは次に提案する。

## 2 幹先端処理の原則の提案

藤岡らの論を下敷きに諸研究を読み込む中で、筆者らは、幹先端処理の特徴を次の3点から整理することが有用だと考えた。それは、幹先端処理は①バウム全姿を捉えること、であると同時に、②幹上部の形態を捉えること、であり、その2つの関係は③全体における部分、部分における全体であること、といえる。順に説明を

加える。ただし、バウムテストは課題画ではあるが、描き手には表現の自由が保証されている、ということを以後の共通認識としたい。

1点目は、藤岡らが類型化の視点にしたように、幹先端処理が全貌的な要素を持つということである。その一部分は、描き手が外輪郭をとまなうバウム全体をどのように表現したかを捉えること、と換言できる。藤岡ら(1971)は「表現される個々のイメージは、その本体において、閉じた輪郭を要求する」と述べている。つまり、描き手には、「実のなる木」を描くという課題に応える中で、外輪郭の構築を(程度の問題はあれ)求められていて、われわれもまたバウム描画過程を見守り、バウムを味わう時、全体から受ける印象は避けられず、その際、外輪郭も自然と把握しているからである。この点に対して、「外輪郭がなければならないのか」との意見が予測される。しかし、「なければならない」という考えは解釈の次元の事柄であって、ここで論じる原則に含むべきものではない。

2点目は、藤岡らが幹上部をイメージの統合性の要点として着目したように、描き手が幹の上をどのように表現したかを理解するという意味で、幹先端処理が一班的・局所的な要素を持つということである。バウム描画を見守る体験や、われわれ自身の描画経験も振り返れば分かりやすいように、「幹の上の部分はどうするか」という課題は、誰しもが問われる事柄である。つまり、幹上部は単なる部分ではなく、バウム描画に決定的な役割を果たす部分であるから、ここに無頓着だと描画結果は木とはなりきれず、課題に応えることにはならない(ここでも解釈の次元と区別してもらいたい)。藤岡らはそれを「エソロジカルな現象」とするが、心理学的には「バウム描画における普遍的な課題」とした方が誤解は少ないだろう。

3点目は、上述の2点の関係である。バウム全体を捉えることをつき詰めて考えると、藤岡らがそうであったように、幹上部への着目は避けられず、幹上部の表現に注目することは、同時に全体をもそれとなく把握することになる。言い換えると、描き手は幹上部で出会う描画課題を何がしかの方略で乗り越えなければならず、

その課題を乗り越えた時にはバウムの全体がいくらか描かれたということであって、バウム全姿ができあがったということは（ここでも外輪郭の程度は別に考えるべきである）、幹上部に何らかの方略がとられたと理解できる。ここで論じる全体と部分との関係は、O. S. Wauchopeと安永浩が強調する意味での「パターン」を参考としている（Wauchope, 1948/1984；安永, 1999）。つまり、バウム描画の体験を全体と部分という対カテゴリーを導入して考えた場合、一方を欠くと描画は成り立たず、全体は常に部分よりも第一義的だといえる（同様に、受け取り手であるわれわれにとっても、一方を欠いては幹先端処理の理解は成り立たない）。幹先端処理を考えるにあたり、先の2点をそれぞれ満たすことは容易だが、この3点目を満たすことは難しい。しかし、この3点目こそが幹先端処理を他の視点と区別するものとして働く独創的な点なのであり、臨床に生きる要素となっている。

以上より、本稿でいう幹先端処理は、特に上の第3点目から、藤岡らの考えをそのまま正確に踏襲したものではない。というのも、彼らは「放散型や基本型と同型の幹先端を表現しながら、なお上部を冠の輪郭によって囲んでいるものがあ」り、「類型分類としては、幹先端の類型の方を優先させる」と述べているからである（藤岡ら, 1971）。この記述は、全体（バウムを描くこと）よりも部分（幹上部の課題を乗り越えること）を優先させているかのように読み取れる。しかし、筆者らの見解は異なる。全体と部分は分かちがたく、また明確に分けるべきでないという前提の下、幹上部の重要性は強調してし過ぎるものではないけれど、やはり全体は部分を作り、部分は全体に依存する、と考えるからである。全体と部分との関係を逆にするとおかしなことになる。通常、描き手は「実のなる木」を描くのであって、幹上部を描くのが目標ではないからである。藤岡らは全体よりも部分を論理的に優先させていたように記しているが、彼らの論文全体を熟読すれば、実際は全体への配慮は行き届いており、本原則とかなり近いようにも解せる。ただし、彼らと筆者らとの

違いは、全体と部分との論理的相違にのみあるのではない。筆者らが提案する原則は、幹先端処理というパースペクティブの中に所謂「開放型」をしっかりと取り入れることを狙っており、同時にこの着目点が、描かれた形態を理解するものとしてだけでなく、描き手の描画体験に沿おうとする見守り手にとっての最低限の拠り所にすることを意図している。

本稿では、上の3点をまとめて「全体 ⇄ 部分」と表し、以後はこの原則から論を進める<sup>註3</sup>。当然、異なる幹先端処理観をもつ者もいよう。本原則は批判によって更に洗練されるべきではあるが、幹先端処理の独自性と有用性を確保する上で、実用的であると考えられる。

### III 問題は何か

#### 1 幹先端処理ではないもの

幹先端処理とそうではないものごとを整理しておく便があると思われる。というのも、幹先端処理研究の混乱（または誤解）の多くが、ほぼこの点に集約されているからである。

日本の研究でしばしば用いられる「幹上開」を取りあげたい（図2）。これは、Kochの「Offene Stammform」を、一谷ら（1968）が邦訳・導入した指標であり、「幹の上端が開放されて描かれているもの」という基準を持つ<sup>註4</sup>。結論を先取りすれば、しばしば幹先端処理の指標とされてきた「幹上開」は、幹先端処理の指標とすべきではない。前項の第3の要素、つまり全体と部分との関係に配慮がないためである。

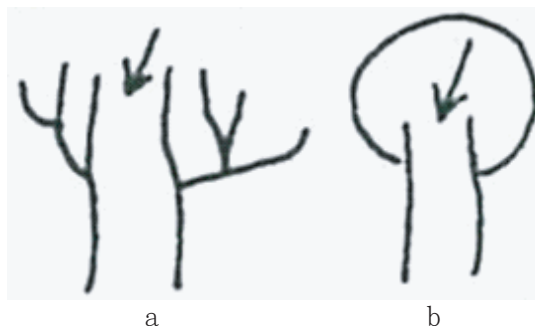


図2 「幹上開」の例（一谷ら, 1968より）

図2-aのバウムは、藤岡らの類型では「先端開放型」になる。しかし、ここに樹冠（包冠線

または包幹線) が加えられたと想像すると、同じ「幹上開」でもわれわれが受ける印象は一変するはずで、類型も「冠型」へと変化する。図 2-b も樹冠が無くなった場合を思い起すと、まったく違うバウムに見えるはずで、類型も変わる。このように、幹上部への印象は、その部分を覆う樹冠や、そこから派生する枝など、バウム全体(正確に述べるならば、幹上部の周りの領域)のことであり、奥田ら(2003)はそれを「エリア」という)との関係を抜きにしては考えられない。幹の上部のみに注目しては、この違いを捉えることはできないのである。「全体⇌部分」の3点から、これは次のようにまとめることができる。

- ①全体という点から見ると、「aはバウムの上部が開いている」が、「bはバウムが閉じている」と理解でき、aとbの差異を識別しえる。しかし、これだけでは、幹先端処理を幹先端処理に依らない類型化と区別ができない。例えば、「混乱型」「欠陥型」などの項目を持つ青木(2004)の類型や、「錯画期」「図式期」「写実期」からなる武田(1973)の段階論がそれである。
- ②部分という点から見ると、「aもbも幹上部は開いている」と理解でき、aとbの部分的一致を認識しえる。しかし、これだけでも、幹先端処理を幹上部の特徴を捉える一般的な指標と区別できない。例えば、「幹上直」「半モミ幹」(Koch, 1957/2010)や、幹からの枝分かれを捉える指標などがそれである。
- ③全体と部分との関連で見ると、「aは幹上部が開いており全体も開いている」と、「bは幹上部が開いており全体としては閉じている」と理解できる。ただし、この要素は全体と部分を数学的に足すのではなく、両者の関係から見るものなので、例えば、「aは幹先端が開いており、そこは外に曝されている」、「bは上端の空いた幹を樹冠が包んでいる」などと理解できていく。この3点目こそが、①と②の問題を克服させ、幹先端処理の独自性を明確にする。さらに、「幹上部を描き手はどうしたのか」という力動的な仮説を持ちつつ、描き手の体験に沿う導きの糸になる。

筆者らの原則は、実はこの第3点目が意味していることに尽きる。しかし、従来の問題を明確にし、本原則の特徴をはっきりさせるためにも、今回は敢えて3点に分けて提示した。なお本原則は、全体に対する指標と部分に対する指標を別箇に設け、その連関から把握する考えとは一線を画す(幹先端処理が全体のみ、あるいは部分のみを捉えることでない点はずで論じ終えている)。このように全体と部分とを分けてからまとめる(という順序があるように見える)発想では、幹先端処理という視点がかつ力動性を減じてしまい、実感を伴って臨床家・研究者が分ける(分かる)というもっとも重要な点を犠牲にしてしまう危険があるためである。また、最終的な類型数もあまりに増えてしまう(全体で5個と部分で5個の指標があれば、理論的には25個もの類型ができ上がってしまう)。

以上より、「幹上開」は「全体⇌部分」を満たしていない。臨床的に有意義な差異を区別しにくく、多くのバウム特徴を一緒くたにしてしまう(このことを最初に指摘したのは岸本(2002)である)。したがって、「幹上開」は部分的把握のための指標にとどめるべきであって、その限りでは有用かもしれないが、幹先端処理の指標としては、若干の重なりはあっても研究者と臨床家の批判に耐えうるものではないと結論づけることができる。こうした問題は実は「幹上開」に限らない。「全体⇌部分」の立場からすれば、幹先端処理と幹上部における部分的な指標とを、多くの研究が混同している。なお、ここでは主に「開閉」の観点から論じたが、閉じたバウムの理解においても「全体⇌部分」は鋭い威力を発揮する。

## 2 全体についての補足

本論文で用いてきた「全体」という語に註釈を加えておく。ここでいう全体とは、概して幹の中間部から上を示しているのであって、幹下部や根はほとんど考慮していない。文字通りの「全体」は、当然それらも含む。しかし、幹下部や根は幹先端処理を理解するという意味での全体には決定的な役割を果たさない。幹下部と根が無くとも「実のなる木」を描きあげることが可能だからである。幹先端処理との関連で捉

えるバウム全姿においては、それらをあまり考慮せずとも問題にはならない（それらの形態部を軽視しているわけではない）。

そうであっても、幾人かの研究者は、筆者らの考えでは全体を強調するために樹冠に重きが置かれ過ぎる、と考えるだろう。この予想される批判に対してさらに付言しておく。まず筆者らは、既述したように、樹冠が時にバウム全体の印象を大きく変える表現部であると考えているので、その意味では確かに重きを置いている。しかしなによりも重要なのは、樹冠ではなく、筆者らが示唆する意味での全体である。樹冠は全体を形作る重要な部分であるが、樹冠のみで全体を捉えることにはならない。幹上部の特徴次第で樹冠の重要性は変わるであって、樹冠の意義が不変である、との立場にはない。

この点に関して、久留米大学の研究グループの「樹冠除去法」による報告が興味深い知見を示している（森田ら、2012；田上ら、2012）。彼らは通常のバウムテストで樹冠が描かれた場合、樹冠を除いてもう一度描くよう求めるこの変法を実施すると、ICD-10の統合失調症非妄想型で図2-aのようなバウムが認められやすいとした。彼らの論旨は「樹冠除去法」が鑑別診断の補助手段として有用であるとするものである。しかし、筆者らはこれらの報告が、描き手にとっても見守り手にとっても、樹冠の存在が大きいことに注目したい。樹冠は一種の「守られ感」を表しているのであろう。仮にバウムから樹冠を取り除いたとして、幹上部が開け放たれていた場合、課題画である以上、必ずその不自然さは解消するよう強制される。そして樹冠がなければ、多くの者にとっては、幹上部を枝分かれさせる方略で乗り切るしかないが、その作業には、一定以上のエネルギーと現実検討能力が、つまり適応的な自我機能の発動が求められるのだろう（とはいえ所謂「開放型」のバウムにネガティブな意味のみを見るわけではない）<sup>註5</sup>。この労力を省いたり、「守られ感」を表現したりする上で、樹冠は恰好の形態部であることを、上述の報告は教えてくれている。

### 3 基準の問題

もう一度、「幹先端処理とは何か」に戻りた

い。この点を更に論じるためには、どうしても類型や指標の基準（定義）に言及しなければならなくなる。

基準に対する筆者らの基本的考えは、比較的ゆるい。それは基準が常に操作的な定義を伴う必要はない（それは難しく、また絶対的なものなどなく、しばしば害をもたらす）と考えるためである。具体的に述べると、基準の明快さは、バウムテストを学び始めた時にまずは納得がいくようなものでなければならない。ただし、さまざまなバウムを受け取り、眺める体験を経たり、実際に研究をして分類したり、あるいは既存の解釈仮説に疑問を感じたりといった経験を積む中で、当初の基準に疑いを持つようなものである必要もある。しかし、よくよく考えた結果、「なるほどこれこれを捉えたいのであれば、そのように基準を設けるしかないだろう」と腑に落ちる程度のもので一番実用的だと考えている。その理由は、バウム表現という1枚たりとも決して同じ表現に出会うことが無い技法を扱う宿命だからである。最初に納得ができない基準はそもそも「基準」としての要件を満たさない。そして、あまり疑問が持たれない基準は硬すぎていて使いにくく、臨床場面に活かしにくいことが多い。さらに、最終的に腑に落ちない場合は、配慮をもって新しい基準、すなわち新しい類型と指標が作られるのが常だからである。

基準について、再び「幹上開」を例に論じてみたい。そもそも「幹上開」は図2のように、2本の幹の上部が完全に開いているもののみが合致するのだろうか。「幹の上端が開放されて

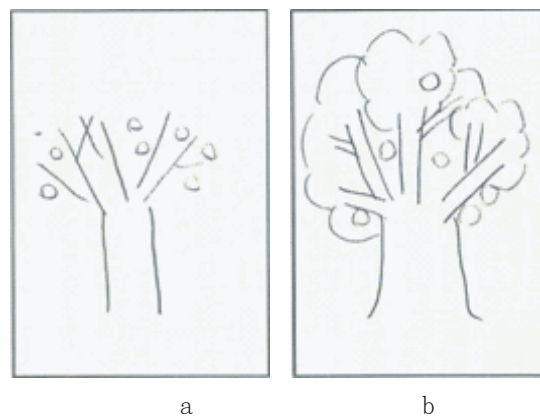


図3 「幹上開」と判断されるかが疑わしいバウム  
(奥田ら、2005bより)



(朝野, 1973より)



(金森, 1981より)

図4 一谷ら(1968)以後の「幹上開」図例

描かれているもの」との基準を文字通り理解すれば、いくらか枝があるものや(図3-a)、幹から枝分かれされたものでも(図3-b)、結果として幹上部が開いていれば「幹上開」と判定され得るのではないだろうか(これは指標を文字で定義することの難しさを如実に示しているのだが)。そうすると、「幹上開」は更に多くの特徴を捉える指標になってくる。

これに関連して、当初から2つのバウム例を並べて図示してきたことにも、混乱の源があるようだ。図2を眺めつつ、元々の基準を読む限り、一谷らは「幹上開」を部分的な形態を捉える指標と位置づけていたが、2つのバウムが並べられたことで、「幹上開」は全体(外輪郭)の開閉を理解するための指標になっていったと考えられる。「幹上開」の導入後に幹先端処理が提唱されたために、こうした混同が生じたのかもしれない。後の研究における図例を見ると(図4)、幹上部を指し示す矢印は消え、「幹上開」は所謂「開放型」のバウムを暗示しているように受け取れる。

以上のことは、今日までの「幹上開」がどういった形態を意味しているかが、極めて共有しにくいことを示している。なお、類似した問題は他の指標でも認められる。

#### 4 記載と記述の問題

もう一つ、幹先端処理にまつわる問題として、

記載および記述についても触れておきたい。

例えば、「幹先端処理が開いてしまっている」と記す論文がいくらかある。記述には研究者の評価と解釈が滲み出るが、そう記述される立ち位置が不明瞭である場合が多い。見方によっては、図2のaとbはともに「開いてしまっている」と記述できるように、研究者の考えをある程度提示してもらわないと、読者は理解できない。これは、研究者が「全体⇌部分」と、岸本(2011)がいう「記述のレベル」を意識することで、幾分か解決は期待できる。

次に、前項の基準の問題とも重なるが、どの研究者の「開放」かという点も重要である。第2報で紹介するように、幹先端処理の「開放」を論じた研究者は多く、さまざまな基準と背景をもつ。そのため、「開放」と素っ気なく記述されては、読者は戸惑う。これまで「所謂」と付言せざるを得なかったのには、こうしたやむを得ない事情がある。

さらに、幹先端処理が「放棄された」「無視された」「処理できず」と記し、図1での「冠型」、つまり、開いた幹上部を樹冠が包んでいるにも関わらず、幹上部が枝分かれされない表現に対して、あたかも描き手の心理的脆弱性を意味するような(病理を強調する)解釈を付す報告もある。その解釈を裏付ける研究、少なくとも疫学的知見は、筆者らの知る限りない。この記述には、先行研究の誤読だけでなく、幹上部が“枝分かれ”という方略で処理されなければならない、という偏見が関わっているのではないか。

その他に重要な点として、研究者間で議論する時、「処理」という言葉が理解やイメージのズレを生じさせやすい、ということもある。「処理」の語が多用されるのは、そもそも命名に含まれていて、藤岡らも頻繁に使っているからだろう。具体例を挙げると、図4の下、金森(1981)の2つの図例は、どちらも「幹上部を枝分かれという形で処理した跡(努力)が見える」と表現できるだろうし、「～を処理しようとした」、「～を処理できなかった」、「～を処理してない」などとも記述できるだろう。このように「処理」という言葉は便利だけれど、それ

が意味するものは価値観や判断基準に大きく左右されるため、共有を難しくさせる側面をもつ。しばしばズレを生んだ議論は、処理したのか／しなかったか、に論点を集めるが、臨床上重要なのは処理の程度とその様式である。したがって、筆者らは「処理」という言葉を極力避けることにした。バウム形態を説明するためや描き手の体験を語るには適さないからではなく、誤解が生じる方を恐れたためである。ほぼ同じ理由から、「幹上部」という言葉を意識的に用い、「幹先端」は引用部分を除いて使わないことにした。

#### IV 提唱以前の研究について

本稿の最後に、幹先端処理のプライオリティを考えるために、提唱以前の研究も概観しておきたい。ここでは、バウムテストを体系化したKarl Kochと、日本の投影法を牽引してきた高橋雅春の業績のみを対象とする。他の業績に触れないのは、それらのほとんどが幹上部を捉える指標を使っており、その点は「幹上開」を取りあげて論じ終えている。

##### 1 Kochの読み取り方

Kochのテキスト第3版(Koch, 1957/2010)には、幹先端処理を想わせる記述がある。この点を詳細に論じるには、1つの論文を要すると思われるので、ここでは紹介にとどめる。

まず、「上端が開いた幹」(図2-a&bを参照)において、Kochは次のように記述している。

両側の幹線がそのまま一線枝の起始部に連続するとき生じる、開いた幹の形。この種の絵はたいがい、絵の才能がないことに起因するが、それでも開いた形に何がしかの意味が認められる。(178頁)

Kochは同じ所で、「先太りの枝」を丁寧に考察しているものの、「上端が開いた幹」(≒幹上開)のバウムにはほとんど文を割いておらず、解説も曖昧なまま終えている。この指標の意味を絵の才能に求めることには同意しかねる部分もあるが、他の意味にも開かれている点に、彼の臨床的な姿勢が垣間見える。

次に、幹の上部を捉える指標「幹上直」(190-194頁)についてである(具体例は図1-aの左の

「幼型」幹上部を参照)。この基準は「幹上部がはんだ付けされたように直線的に閉じられているもの」とされている(一谷ら, 1968)。Kochはこの意味を、描き手の図式的な表現との関連で論じている。また、「早期型」の1つにも位置づけ、通常は発達とともに消失し、さまざまな様式へと変化していく、と理解している。このことは、藤岡らが幹先端処理に着目した理由と重なる。

さらに、事例の記述を見てみよう。催眠実験の部分である。

幹の上部は開放していて、根元は片側だけ地面から浮いている。開放した筒は大砲の砲身となり、そこから原始的なものが発射され、抑制がきかず爆発するかのようだ。(中略)幹から5本の管のような枝があらゆる方向に向かって伸びている。前方に向かって走るようなものもあれば、末広がりになっているものもあり、その結果、抑制がきかないことが強調されている。樹冠の中にまで、怒りが、噴出しそうな興奮として現れているように思われる。(119頁)

彼は、幹を通して上方へと湧き出るエネルギーを仮定し、それを描き手が幹上部においてどのように対処したかを、幹の形と重ね合わせつつ理解しようとする。同様の解釈は、テキスト内で数ヶ所認められる。例えば、最初の臨床事例の枝についてはこうある。

管状に開いた枝の先端は、その量を測りながら情報を放出することを指し示している。量を測りながら、というのは、先が尖っていることに、まさしく適応の意志が表現されているからであり…(273-274頁)

幹上部や枝先は、何らかの心理学的な境界と関係がある、とKochは考えていたようだ。

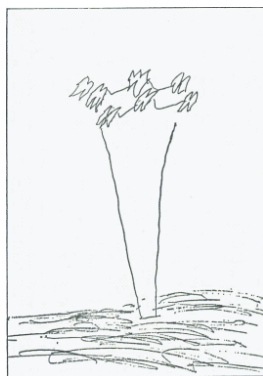
最後に、幹先端処理と関連する「先太りの枝」の部分引用する。ここでは、枝先が開いていることに対して、彼が否定的にも肯定的にも理解していたことが示されている(否定的な記述が多いとの“印象”は拭えないが)。

外に向かって太くなる主枝を描く人は、「すぐに難関にぶち当た」り、すぐに中身を外に全部出してしまふ。(中略)量的な成果を出

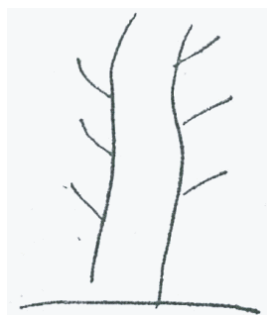


すタイプで、量産するが、(中略) 欲求とか衝動性を表出し外に移していく人である。(中略) 目の前にある興味や好みの方向に向かう場合、忍耐力は絶大である。たいていは、向こう見ずな人、自分を大切にしない人であり、強い体験の欲求を持った人で、(中略) 頑丈で、原始的で、速断的で、攻撃的で、どんな困難も恐れない。(168-169頁)

以上、数ヶ所の引用のみでも、Kochが幹先端処理に似た理解をしていたことが分かる。また、彼の力動的な読み取り方は、今日の幹先端処理理解にも参考になるだろう。しかし、「全体⇌部分」からすれば、Kochの考えは幹先端処理とは言えない。それは彼が、幹上部、またはそこからのびる枝と、やや部分的な理解に留まっている感が否めないからである<sup>註6</sup>。



上に行くほど太くなる幹  
(高橋ら, 2010より)



分離した木  
(高橋, 1967より)

図5 高橋の2つの指標

## 2 高橋の2つの指標

高橋(1967)は、HTP法に関する国内外の研究成果をまとめた『描画テスト診断法』の中で、「上に行くほど太くなる幹」と「分離した木」の指標を論じている(図5)。

「上に行くほど太くなる幹」について彼は、「幹の下のほうが上よりも幅の狭いのは病的な反応で、自我統制力の崩壊を示し、被検者の力をこえた衝動の存在をあらわす」とする(高橋, 1967, 65頁)。この指標は一見、幹先端処理と似た点を捉えてはいるが、「全体⇌部分」を満たしていると言いがたい。つまり、「幹上開」と同じ理由で、この指標は幹先端処理とはすべきではない(「幹上開」と同じように重なりはあるが)。

斎藤ら(1969)がこの指標を研究に取り入れた。その後は「幹：上にいくほど幅が広がる」「先にゆくほど太くなる幹」「先太の幹」と名称を変えてさまざまな研究で用いられ、青木(1980a)では「上程太い幹」となり、バウムの形を乱し不自然な形姿にする「歪み指標」の中に位置づけられている(「歪み指標」について今回は立ち入らない)。現在までの知見をまとめたのが表1である。これに石橋ら(1991)の結果を加えて出現頻度をまとめると、統合失調症者群で約10~16%、神経症群で0%、非臨床群で2~10%となり、描き手の病理性との関連はわずかに読み取れる<sup>註7</sup>。ただし、集積された知見からは、統合失調症に顕著に表れるとまでは言いきれない。その他にも、震災の強弱

表1 「上に行くほど太くなる幹」の研究のまとめ

知見	研究
統合失調症群 > 非臨床群	斎藤ら(1969)・斎藤(1973, 1976, 1977)
統合失調症群 ⇌ 非臨床群	宮崎ら(1987a, 1989)
男性の統合失調症群 ⇌ 女性の統合失調症群	宮崎ら(1987b)
うつ病患者群 ⇌ 非臨床群	斎藤ら(1971)
腎不全患者群 > 非臨床群	斎藤(1973)
子ども+虐待経験 < 非臨床群	山口ら(2006)
子ども+知的障害+精神症状 > 子ども+知的障害	一谷ら(1984)
症状をもたない不登校児 < 不登校児+家庭内暴力	一谷ら(1984)
MPIで外向型 > MPIで内向型	岩川ら(1971)
MPIで神経症傾向大 > MPIで神経症傾向小	岩川ら(1971)

小学1~6年生の横断研究で出現頻度は有意差に変化した(田崎ら, 1991)

分析しているが結果の記載がない研究(斎藤ら1982, 1985; 斎藤1983)

「>」と「<」は出現頻度の統計的有意差ありを、「⇌」は有意差なしを示す。

MPI=Maudsley personality inventory。

で子どもの出現頻度が変化すると報告もある(百々ら, 2002)。先行研究では、樹冠の有無(全体と部分との関係)を考慮せずに合致を判断している可能性があり、同じデータで数度報告している論文もあることは、読み解く上での注意事項となっている。

次の「分離した木」は、「幹の両がわの線がそれぞれ上に伸び、しかも互いに結合しないままに、まるで幹の両はしの線がそれぞれ独立した枝のようにみえて、上に広がっている」バウムのことであって、「感情と知能がバランスを失っていることや、自我の防衛が破れて内的衝動が外界に流れ出る危険をあらわす」という(高橋, 1967, 82頁)。この指標は、「全体 $\rightleftharpoons$ 部分」を一応は満たしているように見える。ただし、定義において樹冠の有無に言及(全体への十分な配慮)がないため、後の研究者がこれをどのように理解したかは定かではない。さらに、高橋は奇異な形態の“印象”から解釈しており、解釈の根拠を明示してはいないことは、本指標を理解する上での注意事項である(第2報で論じる所謂「開放型」の知見は援用できるだろう)。

この指標を使った研究は手許の文献には見つけられなかった。「幹上開」や所謂「開放型」などに取り込まれたということであろう。

以上、高橋の2つの指標は、幹先端処理と似た思想を持つ。しかし、Kochとは対照的に、高橋の指標は部分への着目がやや希薄であると思われる<sup>注釈8</sup>。

本研究で検討した結果、幹先端処理の嚆矢は、やはり藤岡と吉川の業績に求めることが妥当であると言えよう。

## V まとめ

本稿は「幹先端処理とは何か」を整理するために、原則「全体 $\rightleftharpoons$ 部分」を提案し、その有用性を論じつつ、いくつかの問題を明確化した。

「全体 $\rightleftharpoons$ 部分」を大胆に簡略化すれば、幹先端処理とは幹上部の表現様式をバウム全体との関係下で理解するもの、となろう。これは、幹上部の表現を捉えることは、幹先端処理の必要条件であるが十分条件ではない、と換言できるものである。枝や幹や樹冠という比較的区切

りやすい形態部を個別に理解をするのではなく、むしろ各形態部の間の現実的な区切れなさに注目する点こそが、幹先端処理が有する強みなのだと思う。この考えは、還元主義的な立場にも、全体論的な立場にも門戸を開いており、実存・力動などから接近する余地を十分残している。

続く第2報では、提唱以後の研究を概観し、幹先端処理の動向や知見について考察する。展望もそこで記すことにする。

## 注釈

- 1) 他にも論文には、「幼児不定型」「基本型(幹上縁出のもの)」「きのこ型」「ヤシ・バナナ型」「その他(草、蔓状バウムを含む)」「幼型ヤシ」「移行期ヤシ」「成長ヤシ」「バナナ・パパヤ」「その他(草状、幹先端開放などを含む)」の類型が記されている。第2報で紹介する吉川の諸研究が、これら類型の一部を発展させている。
- 2) 藤岡と吉川が心理学以外でのキャリアを持つことは興味深い。幹先端処理を提唱した頃、藤岡はイメージについての論考を多く報告した時期であり、これ以前にはロールシャッハ法を用いた人類学的調査を精力的に行っていた(藤岡, 1952など)。そこではバウムテストも用いていた(藤岡, 1966, 1970)。一方、吉川は蜂とゴキブリの生態学的研究を一通り報告したところで(Yoshikawa, 1954; 吉川, 1967など)、幹先端処理の提唱となるこの論文から彼の「人間生態学」が始まっていく。なお余談だが、吉川は後に、河合幹雄らによる諸外国のバウムも参考にしたと述べている(吉川, 1978a)。しかし、筆者らが調べた限り、それらのデータは今日まで論文という形で発表されていない。先達から学ぼうとするわれわれにとっては、このような貴重な資料が日の目を見ないことは、残念でならない。
- 3) Wauchopeと安永は「パターン」においてA面とB面を想定し、両者の関係を「A/B」と表している(ここで述べている全体はAを、部分はBを意味する)。しかし、AとBとの意味関係を「/」で表すと、「パターン」概念をあまり理解していない人は、一般的な意味での接続詞的用法として誤解するだろう。また「/」は引用の原著発行年と訳書発行年でも使っているため紛らわしい。そこで本研究ではWauchopeと安永の言う意味での「全体/部分」を「全体 $\rightleftharpoons$ 部分」と記すことにした。

- 4) これはKochの図を模写したものであろう。Koch (1949) の27頁, その英訳からの重訳 (Koch, 1952/1970) の26頁, 第3版の邦訳書 (Koch, 1957/2010) の178-179頁に同様の図がある。Kochはバウム表現における「開いた」という意味を大まかに論じる箇所でのこの図を提示している。故に、一谷らの「幹上開」は、その文脈から一部を抜き出して指標化したものと理解すべきである。なお、第3版の邦訳書では「上端が開いた幹」と訳されている。
- 5) 幹先端を枝分かれによって乗り越える方略を、「全体⇌部分」から考えていく上で、筆者らはP. Janetの「心理学的緊張」(Janet, 1923/1981) がもっとも適した概念だと現在感じている。しかし、第2報でも論じるように、幹先端処理という営為の意味を心理学的に考えるには、研究知見の集積が(および筆者らの理解の成熟も)不足しており、本研究の目的も大きく超える。
- 6) 中島 (2011, 131頁) は、Kochが詳しく検討した58指標の中に、幹先端処理に関する指標は「幹上直」「半モミ型」「切断された枝、折れた枝、折れた幹」「上縁はみ出し」の4つしかないとする。それは彼女が、幹先端処理を幹上部という部分にのみ注目するためであろう(詳しくは第2報で論じる)。「全体⇌部分」からすれば、樹冠や枝も関係してくるので、幹先端処理に関する指標はこの4つのみではない。
- 7) 以後、各論文での「精神分裂病」と「精神遅滞」の語は、引用部を除き、それぞれ「統合失調症」と「知的障害」に改めてから記す。第2報でも同じ。
- 8) 改訂版の『描画テスト入門』(高橋, 1974, 67 & 69頁) では「開放の幹」との項が設けられ、ほぼ同様の記述がある。後の『樹木画テスト』(高橋ら, 1986, 62-66頁, 2010, 62-66頁) では、「上に行くほど太くなる幹」は「幹の上が広くなった木」と名称が変わっている。また、「分離した木」は「分離した幹」となっていて、安易な解釈は控えるべきだと述べてつも、「適応を失っている人に生じるサインである」とある。
3. 百々尚美・山田富美雄 (2002). 小学生における震度と学年の震災ストレス反応に対する影響—バウムテストを用いて. ヒューマン・ケア研究, 3 (4): 11-21.
4. 藤岡喜愛 (1952). Rorschach TestによるPersonalityの調査 (I)—奈良県磯城郡平野村の場合. 京都大学人文科学研究所調査報告, 8: 1-24.
5. 藤岡喜愛 (1966). 狩猟採集民ワティンディガのパーソナリティー—パーソナリティーの進化序論. 人文学報, 22: 1-66.
6. 藤岡喜愛 (1970). ロールシャハ・テストによるパーソナリティーの調査—サン・リエ村の場合. 京都大学人文科学研究所調査報告, 25: 1-87.
7. 藤岡喜愛・吉川公雄 (1971). 人類学的に見た、バウムによるイメージの表現. 季刊人類学, 2 (3): 3-28.
8. 一谷彊・林勝造・津田浩一 (1968). 樹木画テストの研究KochのBaumtestにおける発達の検討. 京都教育大学紀要Ser. A, 33: 47-68.
9. 一谷彊・西川満・村澤孝子 (1984). バウムテストにみられる精神遅滞者の反応特徴. 京都教育大学紀要Ser. A, 65: 1-27.
10. 石橋富和・小坂茂・森津誠 (1991). バウムテストと顕在性不安尺度—精神分裂病者の場合. 東大阪短期大学研究紀要, 17: 21-33.
11. 岩川淳・中野とも子 (1971). バウム・テスト (Koch) に関する研究—自己評定法 (日本版モーズレイ性格検査) との対応性について. 和歌山信愛女子短期大学 信愛紀要, 12: 26-53.
12. Janet P. (1923). *La médecine psychologique*. Paris: Ernest Flammarion. 松本雅彦 (訳) (1981). 心理学的医学. みすず書房.
13. 金盛浦子 (1981). 樹の描画による人格診断. In; 岩井寛 (編著) 描画による心の診断—子どもの正常と異常をみるために. 日本文化科学社, pp. 43-67.
14. 岸本寛史 (2002). バウムの幹先端処理と境界脆弱症候群. 心理臨床学研究, 20 (1): 1-11.
15. 岸本寛史 (2011). 指標の意味と既述のレベル—バウムにおける幹先端処理の検討から. 臨床心理身体運動学研究, 13 (1): 19-29.
16. Koch, C. (1952). *The tree test: the tree-drawing test as an aid in psychodiagnosis*. Berne: Hans Huber. 林勝造・国吉政一・一谷彊 (訳) (1970). バウムテスト—樹木画による人格診断法. 日本文化科学社.
17. Koch, K. (1949). *Der Baum-test: der Baumzeichen-versuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel*. Bern: Hans Huber.
18. Koch, K. (1957). *Der Baumtest: der*

#### 引用文献

1. 青木健次 (1980a). バウムテストの臨床的活用—新実施方法による新たな知見を加えて. 京都大学学生懇話室紀要, 10: 59-81.
2. 朝野浩 (1973). 精神薄弱児の描画の発達. In; 林勝造・一谷彊 (編著) バウム・テストの臨床的研究. 日本文化科学社, pp. 119-162.

- Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel. 3. Auflage.* Bern: Hans Huber.
- 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男 (訳) (2010). バウムテスト 第3版—心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究. 誠信書房.
19. 宮崎忠男・藤井純子・小林淳 (1987a). 精神分裂病者のバウムテストの因子分析—3因子抽出の場合. 心理臨床学研究, 5 (1): 44-50.
  20. 宮崎忠男・藤井純子・小林淳・望月秋一・上島求 (1987b). 精神分裂病者のバウム・テストにみられる性差について. 心理測定ジャーナル, 23(9): 14-21.
  21. 宮崎忠男・藤井純子・小林淳 (1989). 精神分裂病者のバウムテストの因子分析—4因子抽出の場合. 心理臨床, 2(1): 39-49.
  22. 森田喜一郎・五十君啓泰・石井洋平・藤本僚・小路純央・柳本寛子・内村直尚 (2012). バウムテストの樹冠除去法の診断的意義について. 久留米医学会誌, 75(10-11): 315-323.
  23. 中島ナオミ (2011). バウムテストの発達指標に関する研究. 甲子園大学博士論文.
  24. 奥田亮 (2005b). 幹先端処理において体験されうること—幹先端が描き手に何を引き起こすか. In; 山中康裕・皆藤章・角野善宏 (編) バウムの心理臨床 (京大心理臨床シリーズ1). 創元社, pp. 182-197.
  25. 奥田亮・鶴田英也・山川裕樹・中野祐子・安立奈歩・西堀智香子・松山真弓・鳴岩伸生 (2003). バウムテストの幹先端処理に関する研究. In; 皆藤章 (研究代表) 臨床場面における描画法の理論的・実証的研究—画像データベースシステムの「視点探索ツール」開発とその発展的利用を通じて. 平成12-14年度文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究 (B) (2): 12410034) 研究成果報告書, pp. 11-35.
  26. 斎藤通明 (1973). 陳旧性分裂病・うつ状態にみられる特徴. In; 林勝造・一谷彊 (編著) バウム・テストの臨床的研究. 日本文化科学社, pp. 69-101.
  27. 斎藤通明 (1976). 精神分裂病者のバウム・テスト. 心理測定ジャーナル, 12 (8): 11-16.
  28. 斎藤通明 (1977). バウム・テストの研究 (第3報)—慢性血液透析患者 (初期) の場合. 松仁会誌, 16: 29-38.
  29. 斎藤通明 (1983). バウム・テストにみられる心因性視力障害児の心的特徴について. 心理測定ジャーナル, 19 (8): 7-12.
  30. 斎藤通明・大和田健夫 (1969). バウムテストの研究 (第1報)—精神分裂病の場合. 松仁会誌, 8: 83-92.
  31. 斎藤通明・大和田健夫 (1971). バウムテストの研究 (第2報)—うつ状態の場合. 松仁会誌, 10: 29-37.
  32. 斎藤通明・松永一郎 (1982). バウム・テストにみられる標準練習過程での心理的变化について. 自律訓練研究, 4 (1): 35-43.
  33. 斎藤通明・松永一郎 (1985). バウム・テストにみられるAT非適応者の心的特徴について (第2報). 自律訓練研究, 6 (1): 17-26.
  34. 高橋雅春 (1967). 描画テスト診断法—HTPテスト. 文教書院.
  35. 高橋雅春 (1974). 描画テスト入門—HTPテスト. 文教書院.
  36. 高橋雅春・高橋依子 (1986). 樹木画テスト. 文教書院.
  37. 高橋雅春・高橋依子 (2010). 樹木画テスト. 北大路書房.
  38. 田上雅之・五十君啓泰・宮崎英義・森田喜一郎 (2012). バウムテストにおける樹冠除去法の意義とその発展. 九州神経精神医学, 58 (1): 7-13.
  39. 田崎権一・藤土圭三 (1991). バウム・テスト描画特徴の横断的研究. 山口大学研究論叢 (第三部), 40: 15-22.
  40. 山口智子・内田一成 (2006). 児童虐待のスクリーニング法としてのバウムテストの臨床的有用性—判別分析による検討. 上越教育大学心理教育相談研究, 5: 27-36.
  41. 安永浩 (1999). 精神の幾何学 新装版. 岩波書店.
  42. Yoshikawa, K. (1954). On the nest evacuation: Ecological studies of polistes wasps, I. *Journal of the Institute of Polytechnics, Osaka City University. Ser. D, Biology*, 5: 9-17.
  43. 吉川公雄 (1967). 昆虫における家族生活の進化—とくに成虫間の個体認識の問題をめぐって. In; 森下正明・吉良竜夫 (編) 自然—生態学的研究 (今西錦司博士還暦記念論文集). 中央公論社, pp. 189-210.
  44. 吉川公雄 (1978a). BAUMTEST—ボルネオにおける研究. In; 加藤泰安・中尾佐助・梅棹忠夫 (編) 社会 文化 人類学 (今西錦司博士古稀記念論文集). 中央公論社, pp. 335-396.
  45. Wauchope, O.S. (1948). *Deviation into sense: the nature of explanation*. London: Faber & Faber. 深瀬基寛 (訳) (1984). ものの考え方—合理性への逸脱. 講談社.

#### 付記

本稿は2013年, 日本心理臨床学会第32回秋季大会におけるポスター発表を加筆したものである。